

博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査） 加藤雄二 印

学位申請者 解 放

論 文 名 安部公房における引揚げと検閲

○結論及び審査の経過

解放氏より提出された博士学位請求論文「安部公房における引揚げと検閲」について、論文審査と最終口述試験の結果、審査委員会は一致して博士（学術）の学位を授与するにふさわしい研究論文であるとの結論に達した。

同論文に対しては、解放氏が博士後期課程在学中に指導委員会を構成していた柴田勝二（主任指導）、村尾誠一、加藤雄二の3名が二度の事前審査を行い、一度目においてはかなりの改稿、修正が求められると判断されたために再度の論文提出を求め、二度目の事前審査においては多少の修正を施した後に学位請求論文を提出し、本審査へ進むことが妥当であるとの結論を得た。論文提出後、学内から論文内容と重なる日本思想史を専門とする米谷匡史、及び中国近現代文学を専門とする橋本雄一を加え、加藤雄二を主査として5名により審査委員会が構成され、2021年3月30日にZoomを用いたオンライン形式での公開審査が行われた。

○論文の概要

本論文は安部公房の初期作品の世界に焦点を当て、安部が作家として出発する前の青年期を戦時下の「満洲」で過ごし、終戦後日本に帰還したいわゆる「引揚げ者」であることに重点を置いて、その引揚げの経験が安部の文学者としての形成にどのように関与したのかを中心的に考察するとともに、終戦後のGHQによる検閲を安部が強く意識していたことを考慮しつつ、それが初期作品にどのような影を投げかけているかを探求するものである。

構成としては序章「安部公房とその思想」、第一部「実存主義の崩壊と安部公房の引揚げ」、第二部「シュールレアリスムと共産主義への傾倒」から成っている。序章で安部公房の辿った生活と思想の軌跡を概観したのにつづいて、第一部では安部公房の「満洲」経験と終戦時の引揚げの記憶を核として、『けものたちは故郷をめざす』『異端者の告発』『終りし道の標べに』という三つの出発時の作品に焦点化して論じている。第二部では戦後作家として歩み始めた安部の作品に影を投げかけている検閲の問題に重きを置き、前部でも取り上げられた『終りし道の標べに』を含め、『牧草』『デンドロカカリヤ』『壁あつき部屋』といった初期作品に見られる改稿に、検閲に対峙する安部の姿勢がどのように現れているかを考察し、そこから『壁——S・カルマ氏の犯罪』『砂の女』といった安部の名を広く知らしめた代表的作品との連続性を捉えようとしている。

第一部では、青年期にリルケに感化される形で実存主義に強い影響を受けていた安部が、終戦後の引揚げの経験によってその観念性を空無化され、混乱に満ちた現実と直面することで表現者として歩み始めた経緯が辿られている。もちろん引揚げを経験した作家は安部にとどまらず多数いるが、安部の引揚げ体験にはやや特異な点があることに力点が置かれている。すなわち、安部の父親は「満洲医科大学」の助教授を経て内科医を開業していたエリートであり、「満洲」移住者のなかでも上層に属する家庭で安部は育っている。そのため終戦後もソ連軍に敬意を払われ、多くの引揚げ者が蒙ったような襲撃の危険性は経験しなかった。逆にそのために安部は自分たちが優位者ゆえに加害の立場にある者であるという意識を持ち、引揚げに対しても被害者ではなく加害者の視線を投げかけることになった。

そうした眼差しが引揚げをモチーフとする作品にも現れているというのが解放氏の論点であり、その代表的な事例として、中国大陸からの引揚げの行為自体を描いた唯一の作品である『けものたちは故郷をめざす』が論じられている。解放氏によれば、同作の主人公久三は故郷の日本を目指してあてどなく彷徨する棄民的被抑圧者として眺められることが多かったが、行動をとともにする中国人、朝鮮人に対する彼の眼差しには劣位者に対する意識が含まれており、日本人としての優位性をもって振舞う場面が散見される。そこに引揚げを加害行為として捉える安部の意識が浮上している。またこの作品は中国の作家蕭軍の『同行者』『羊』の影響によって書かれている可能性があり、とくに主人公が中国人らとともに移動を続けるものの故郷の日本に辿り着けないという安部作品の着想は、同じく主人公が目的地を目指す途上で出会った男と移動をとともにし、結局目的地を見失ってしまうという経過を辿る『同行者』を下敷きにしていて考えられるとされる。

この安部公房的引揚げ者の面影が比喩的に盛り込まれているとされるのが『異端者の告発』で、語り手に与えられた「異端者」という設定自体が、同国人から差別されがちであった引揚げ者を示唆していることに加えて、この作品の空間的な布置をなす「原始的な町」と「文明的な町」の対比は日本と「満洲」のそれと照応しているという。それは作中の「原始的な町」が、安部が過ごした奉天（現瀋陽）と符合する部分があり、ここをモデルとしていることが考えられるからである。またこの「原始的な町」は「X」なる人物によって三十年間支配されてきたと記されているが、その〈支配者〉は安部自身に想定され、そこに植民地に対する加害者としての意識が託されているとされる。第一部の終章では『終りし道の標べに』が論じられ、旧版と新版にみられる表現の差違から、後者においてはやはり安部の加害者としての引揚げ者であった意識が浮上しているという。この改訂は1960年代にされているが、解放氏はそこに引揚げに関する語り、この時代に被害者の立場のものから加害者の立場のものへと変容していったことの反映があるとしている。

第二部では主に終戦時のGHQによる検閲と、それを予期してみずから作家が対応する自己検閲の問題が、安部作品の表現との関わりで焦点化されている。解放氏は『夢の逃亡』の「後記」にみられる「あの時代の霧」という言葉がGHQによる検閲を指しているとし、安部が検閲の圧力と格闘しつつ終戦時の執筆活動を行っていたことがうかがわれるとされる。作品としては1948年に発表され、その後20年後に改訂された『牧草』にまず言及され、主人公が初出時よりも暴力的な人物に変えられているのは、当初の表現が検閲を意識していたために、本来の意図が抑えられていたからだという。つづいてやはり48年に発表

され、17年後に改訂された『終りし道の標べに』が取り上げられ、旧版では戦争が抽象的な様相で扱われていたのに対して、新版では「関東軍」「満洲国」といった固有名が使われて日中間のものであることが明示されている。そしてこうしたGHQの検閲を意識する抑圧が安部をシュールリアリズムに向かわせる一因をなすことになる」と解放氏は述べる。シュールリアリズムは被抑圧者の芸術としての側面があり、安部は「無意識」や「潜在意識」を反映する領域としてシュールリアリズム芸術を眺めていたからである。

つづく章では一般的には安部文学の特色ともされるそのシュールリアリズムの色合いの作品として『デンドロカカリヤ』と『S・カルマ氏の犯罪』が取り上げられている。人間が植物に変身する寓話的作品である『デンドロカカリヤ』でも1949年の初出と52年の改訂版の間で改稿が施されているが、後者では登場人物の整理や物語構造の簡略化がなされており、その背景としてはGHQへの対応よりも当時せり上がってきていたルポルタージュ形式の文学への安部の志向があるとされる。反面初出においてもGHQの検閲に対する揶揄が垣間見られるが、それはこの頃にはGHQの検閲の厳しさが緩んできていたことの現れとして捉えられる。名前を喪失した男の帰趨を描く『S・カルマ氏の犯罪』の最後で「僕」が壁に変形することは意識が物質に置換されることを意味しており、この唯物論的ともいえる帰結は、安部のなかで浮上してきていた共産主義への接近を示唆し、1951年の日本共産党入党の伏線ともなっているという。

解放氏によれば、この時期の安部には反体制的な性格をもつルポルタージュ的な作品が目立つが、安部が自身の『裏切られた戦争犯罪人』というルポルタージュをシナリオに書き換え、小林昌樹監督によって映画化された『壁あつき部屋』はむしろBC級戦犯を加害者ではなく被害者として描いており、反体制的な色合いが希釈されている。それは安部が次第に共産党と確執を来すようになり、共産党への批判を行うようになった推移と照応しているとされる。安部の共産党への批判は紀行エッセイ『東欧に行く』にも流れており、東欧の共産主義国家が「プラスの矛盾」によって変革のエネルギーを生みだしているのに対し、日本共産党はいまだにユートピア的な社会主義を奉じているゆえにエネルギーを欠いた「マイナスの矛盾」しかなく、「日本共産党は世界の孤児だ」という断定が下されている。こうした批判意識が日本共産党との確執を強めることになり、1957年に発表された『鏡と呼子』における、滞在する村で家出を煽動する組織を作ろうとして果たさないKという人物にも託されている。Kは家出を煽動しつつ村全体を巻き込む暴力的な革命を起こして学校の教師たちに対抗しようとしているが、この構図は東欧諸国に見られる「プラスの矛盾」によるエネルギーを評価しようとする安部と、それに対して否定的であった日本共産党指導部との対立の投影として捉えられるからである。

第二部終章では、安部の代表作の一つである『砂の女』が論じられ、定着を好まず「流動」に固執する「男」の姿に、安部の引揚げ者としての面影がみられるという。この作品では主人公仁木順平の砂や砂漠に対する観念的な理解が、砂の穴での女との共棲によって覆られていくが、この構図は「意識」が「現実」を上回ることができないことを物語っている点で、安部の当初の実存主義的思考からの距離を示唆している。そして都市生活者であった仁木が最終的に砂の穴の中という周縁的空間での生活を選ぶところに、安部の共産主義への傾斜が現れているとされる。

○論文の評価

本論文は前衛的なシュールレアリスムの作家と見なされがちな安部公房の、青年期における中国大陸からの引揚げという出来事を焦点化し、その意味とそれが後の安部文学に及ぼすことになった影響を検討するという、ユニークな内容の研究である。安部が作家になる前の経験を基点として安部文学を眺めるというのはこれまで取られなかった視点であり、1962年の『砂の女』までとはいえ、安部文学に対する一つの新たな切り口が示されていることは評価に値する。引揚げという行為を通して、安部は国家的なアイデンティティを失った形での生存という事態に直面することになったが、その感覚が初期の実存主義的な傾向の作品に投げかけられているというのは説得力をもつ解釈であろう。またもっぱら被害者の立場から語られがちであった日本人の引揚げ自体についても、それを加害者としての意識から眺めることができる可能性を『けものたちは故郷をめざす』などの安部の作品から探ろうとする読解も斬新である。そしてそうした引揚げの経験を起点としてシュールレアリスムに向かい、さらにはそこから共産主義的な思考へと傾斜していくという論の展開も安部文学の変容に対する解釈として興味深い。

反面審査委員より、問題点もいくつか指摘された。まず解放氏が強調する、引揚げにおいて日本人が加害者的な存在でもあったという面については、その加害は多くは生き延びるために同胞に対してなされたものであり、入植者として現地の人々に対してなされたものは引揚げとは区別して捉えるべきではないかという指摘が数名の委員より投げかけられた。また安部の青年期における引揚げの経験がその後の作品に影を落としているにしても、重要なのは安部作品の虚構的な構築性であり、その前衛性をはらんだ構築性に対する探求がもっとされる余地があったという意見が出され、検閲の問題にしても安部のどの作品が検閲の対象となったかが明確にされていないことも指摘された。あるいは『けものたちは故郷をめざす』を触発した作品として提示されている中国人作家蕭軍との比較は興味深いものの、その重なりはすべて蓋然性を推定する域にとどまっており、中国東北植民地期（日本人が言う旧「満洲」）からの被害と脱出体験を持つ中国人作家と安部の同一視という、歴史的に見て未整理の思考と叙述もあった。また日本が進出する以前の中国東北地方が「満洲」と記されているなど、用語の不備も散見された。

ただこうした不足があるにしても、解放氏の論文自体の独創的な価値は高く評価されるべきものであり、上記の指摘に対して解放氏は誠実に応答し、今後の課題としてそれらに取り組んでいく旨が示された。全体としては斬新な切り口をもつ優れた論文であり、最終試験での応答を踏まえた上で、審査委員会は全会一致で、解放氏の提出論文を博士（学術）の学位にふさわしいものと判断した。